

九州の押型文土器について

― 押型文土器群の分類と編年 ―

橋 昌 信

一 はじめに

考古学の研究は過去の人々が残した「物質的遺物」を考察する事によって進められており、現在までのところ物質的遺物をその研究の手だてとする以外、他の方法はないと考える。先史時代における代表的な物質的遺物として土器と石器がある。これらの土器や石器は先史時代の人々の生活で最も重要でかつ必要な生活道具なのである。それだけに考古学の研究を支える貴重な編年の基準資料として取り扱つかわれて来ている。特に縄文時代の研究は「縄文式土器」を中心に展開されている。これは粘土という素材が手に入りやすく、またたやすく思うまま器形・文様になってくれさらに一度火を通すことによって形・文様は固定される。要するに土器にはその民族とその時代の性格を如実に示してくれる遺物として考古学上の最も有力な手がかりとなっている。一方、石は自然の生んだ最も堅い素材で、剝離性を持っており、打ちかくことによって鋭い刃が得られるので石器時代の人々によって盛んに利用された利器としての石器が存在するのである。

土をこねて作られた土器も、石を素材にして製作された石器も人間の知性が自然の一部である物質にはたらきかけた結果できあがった産物である。そこには当然、製作者、あるいは製作者が属している社会の意志が反映さ

れているはずである。一般にすべての道具には必ず目的があり、機能があると言われている。用途によって形態が定められ、またより機能を高める形態が要求される。その事は逆に道具の形態からその機能、用途を考え、さらに進んでその機能や用途を必要とした当時の人々の動機や原因までを推知することも可能なはずである。

一個の土器も、一点の石器も、ある時代の必然性の上に登場した一種の道具なのである。いつの時代においても、人間の生活が変化すると当然使用する道具類も遅かれ早かれ変わるものである。逆に使う道具が変化することによって、人間の生活が変わると言うべきかも知れない。とにかく生活と道具は常に密接な関連をもっているのである。

縄文時代は「縄文式土器」と呼ばれている土器に代表されており、利器としては、石斧、石鏃、石匙、石錘等の石器が普遍的に製作使用されている。これが次の弥生時代になると、以前とは違った「弥生式土器」が全国的に普及するという変化があらわれ、利器の前では青銅器、鉄器という、これまでの石を素材にしたものとは比較にならないほど機能的にすぐれた道具が登上するのである。弥生時代におけるこれらの新しい土器、利器の誕生は、今までの狩猟、漁撈、採集の生活から、水田耕作という新しい生産経済への発展と関連しているのである。以上、考古学研究における遺物の意義について、ごく簡単に触れてきたわけである。これらの上に立って、九州に於ける縄文時代の最も早い時期の押型文土器群について考察を行ないたいと考える。

縄文文化の研究は今日のところ、土器による考察が最も進んでおり、土器型式の中に歴史の主体者としての人間を見出そうとしている。特に土器型式による編年的研究は各地域の時間と空間を追求する上で非常な成果を

上げているのである。石器をはじめ、その他の考古学の遺物遺跡も、第一段階としていかなる土器に共伴したものであるか、言いかえるならば、時期の決定を土器型式の編年に負わなければならないのが現状である。押型文土器文化の研究においてもまたしかりである。

二 押型文土器群の分類

九州の押型文土器群をまず大きく三つのグループに分けて把握することにする。

第一は大分県の早水台遺跡出土の押型文土器に代表される尖底の押型文土器のグループである。第二に九州以外の地ではその出土例を聞くことが出来ない平底の押型文土器で、鹿児島県の出水貝塚下層出土のものを第二のグループの典型的なものとする事が出来る。第三として、押型文の施文に他の施文要素が加わり、さらに器形は胴部に「く」の字形の屈曲を呈する平底の土器群である。この代表的な遺跡として、鹿児島県の手向山遺跡をあげることが出来る。

以上の三大別を更に細分して、押型文土器群の時間的な流れとその空間的広がり考察することにする。

押型文土器第Ⅰ類

第Ⅰ類は、早水台遺跡の発掘調査^①において、主として第Ⅲ層（最下層）より出土している山形文を主体とする尖底の押型文土器である。この土器は表面に横走した山形押型文が施こされ、器壁裏面の口縁部に原体条痕文^②が施文される事が多く、その下に表面と同様な山形文が見られる。全般的に文様は小さく整っており、小形の彫刻原体が使用されている。器形は口縁部が直口し、その多くは口唇断面が山形を呈している。胴部は全くふ

くらみがなく、底部近くにおいて比較的急に彎曲しているため尖った底部となる。土器の口縁部直径に比較してわずかに高さが高い程度で一見ずんぐりした感じをうけ、小形のものが多い。胎土には石英・砂等がかなり含まれており、焼成はもろく押型文の文様が消えてしまっているものもある。第Ⅰ類の押型文土器には少数ながら捺糸文の尖底土器が伴っており、このことは第Ⅰ類の大きな特色と見なされる。

押型文土器第Ⅱ類

早水台遺跡において、第Ⅰ類と共にⅢ層からも若干出土しているが、その包含層の主体は第Ⅱ層に見られる楕円の押型文土器である。この第Ⅱ類の文様は楕円文によって代表され、第Ⅰ類と同様に横走した楕円文が全面に施文されている。器壁の裏面にもやはり楕円文を施こされるのが通常であるが、原体条痕文は稀にしか見ることが出来ない。器形は第Ⅰ類と大きく変化することはないが、多少胴部にふくらみを有し、底部が肉厚となる尖底深形土器である。胎土・焼成は第Ⅰ類と同様に石英・長石を多量に混在した砂粒を含んでおり、低い温度でやかれてゐる。第Ⅱ類の大きな特色として、多量の無文土器を伴ない、その数量は押型文土器を幾分上まわるほどである。無文土器は第Ⅰ類にも伴って出土しているが、量から考えてもそのピークは第Ⅱ類に置かれるであろう。第Ⅱ類に多量に伴う無文土器は、器形の面において押型文土器よりパラエティに富んでおり、一番の違いは、器壁の厚さが厚い点にある。しかし胎土・焼成については全く同様である。第Ⅱ類の分布は九州全域に見られ、第Ⅰ類より広い分布を示めている。

早水台遺跡出土の押型文土器をⅠ類とⅡ類とに細別を行なったが、以上の二者とは異なつた押型文土器の一群

が少数ながら存在している。この一群の押型文土器は口縁部が極端に広く開いた鉢形の尖底土器でⅠ・Ⅱ類に比較して著しく浅いという特徴を有する。文様は楕円文のみに限られて施文され、出土も第Ⅰ層に限られている。層位的な観察からも、第Ⅰ・Ⅱ類よりも新しい時期の所産が考えられるが、早水台遺跡においても資料が極めて少なく、それに他の押型文土器を出土する遺跡において突見されることがなく、報告例も聞かれないので、現在の時点においてあえて第Ⅲ類としなかった。^③

押型文土器第Ⅲ類

器形、文様が今までのⅠ・Ⅱ類に比較して粗大化した押型文土器群で、このⅢ類の好資料を大分県の田村遺跡^④に求めることが出来る。断片的な資料としては各地に見られるがⅠ・Ⅱ類ほど顕著でない。第Ⅲ類の大きな特徴の一つはその粗大な楕円文に見られ、楕円の長軸が1cm近くもある大形の楕円文を縦あるいは斜方向に回転させて施文している。楕円文に比べて量的には少ないが、やはり大形の山形文を縦方向に施文したものがある。このⅢ類の押型文土器の口縁部裏面には太い凹線が弧状に口唇に向って施文されることがある。文様は楕円文と山形文と違いが認められるが、器形は同じ特徴を有する。すなわち、口縁部が朝顔状に大きく外反し、胴部にふくらみを持ち、著しく尖った底の尖底深鉢形土器で概して大形である。器壁の厚さも1cm前後の厚いものが多い。この第Ⅲ類もⅠ・Ⅱ類と同様な無文土器を共伴している。口縁部が直口あるいは僅かに外反した鉢形の尖底文土器である。この無文土器と共に、器形の全く異なる無文土器が出土している。それは口縁部が内反し、胴部のふくらみが誇張され、底部が平底に近い丸底となる鉢形の無文土器である。器形より考察すると後者の無文土器が時

期的に新しい所産とされるが田村遺跡において、層位的な区別はなされていない。

押型文土器第IV類

第III類と同様な比較的大きな楕円の押型文土器が知られている。文様においては、III類と特別大きな変化は認められないが、施文が非常に粗雑である。陰陽が不明確で、しかも一般的に器面全体に及んでない事が指摘でき。器形についてみると、口縁部が直口し、胴部がやゝふくらみ、丸底を呈する大形の深鉢形土器をその基本形としており、第III類とは著しく趣を異にしている。胎上には砂粒が混入されており、焼成はよくない。古くから知られている佐賀県の戦場ヶ谷遺跡^⑤や宮崎県の大貫遺跡^⑥出土の押型文土器がこの第IV類に入ると思われるが、非常に類例が少なく分布についても今のところ明確さを欠くと言わざるを得ない。

押型文土器第V類

出水貝塚^⑦の下層出土の平底押型文土器を代表とする一群を第V類としてとりあつかう。口縁部が外反し、胴部にふくらみをみせ、底部は平底となる。ほとんどの筒形を呈する比較的大形の深鉢形押型文土器である。文様は山形文と楕円文で大半を占めており、それらは一般に縦方向で施文されている。施文は表面全体と外反した口縁部の裏面および口唇部に見られるのが普通である。文様は今まで述べてきたどの押型文よりも明瞭に施文されており、胎土中にはほとんど異物が混入されておらず、焼成は極めて良好である。第III類やIV類と時間的な大きな差は考えられないであろうが、器形、文様において著しい相違が指摘できるのである。分布についても九州各地に見られ、戦場ヶ谷遺跡と同様に古くから知られている熊本県の沈目、池頭^⑧や大分県ヤトコロ遺跡^⑨の押型文はこの第V

類として分類できる。

押型文土器第Ⅵ類

現在までのところ、局部的な地域にしかも断片的にしか知られないが、第Ⅴ類と比較的類似した特徴をもち、次に述べる第Ⅶ類とは極めて密接な関連が考えられる一群の平底の押型文土器がありそれを第Ⅵ類とする。器形についてみると、口縁部がやゝ外反し、が胴部において一段あるいは二段のはりだしがある縦に長い深鉢形土器である。底部は平底で、しかもあげ底になると考えられる。文様の主体は山形押型文で、山と山との間隔の長いもので、多くは縦方向に施文されている。熊本県人吉市の石清水遺跡^⑩や鹿児島県大口市の永山遺跡^⑪出土の押型文土器を第Ⅵ類としてあげることが出来る。この土器の分布は現在までのところ熊本県と境をなす大口盆地にその中心が考えられ、他地域ではその出土例を聞かない。

押型文土器第Ⅶ類

鹿児島県の北端に所在する手向山遺跡・白坂遺跡^⑫出土の土器を標式とする一群の押型文土器である。口縁部が外反し、胴部中央よりやゝ下方において「く」の字形に屈曲し、幾分上げ底気味になる平底の深形土器をその基本形としている。文様の要素として押型文・沈線文、それらにみみずばれ文^⑬があげられ、これに押型文、刻目あるいは刺突文が施文された張付凸帯文が口縁部直下ないし胴部の屈曲部につけられるのである。このように第Ⅶ類は押型文以外の施文方法が多彩に用いられ、明らかに押型文土器群以外の土器群の影響が考えられるのである。第Ⅶ類の分布については従来第Ⅵ類と同様、大口盆地にその中心が求められていたが、最近では宮崎県の跡江貝塚^⑭

や大分県の黒山遺跡に類例が求められ分布が次第に広がっているのである。分布の拡大に併て第Ⅶ類とした押型文土器群はその文様構成から更に細分が可能と考えられる。例えば凸帯文の有無について考察すると、手向山遺跡出土のⅥ類には極めて顕著であるが、白坂遺跡ではそれが少なくなっており、更に跡江貝塚では明瞭な貼付凸帯文は見られないのである。

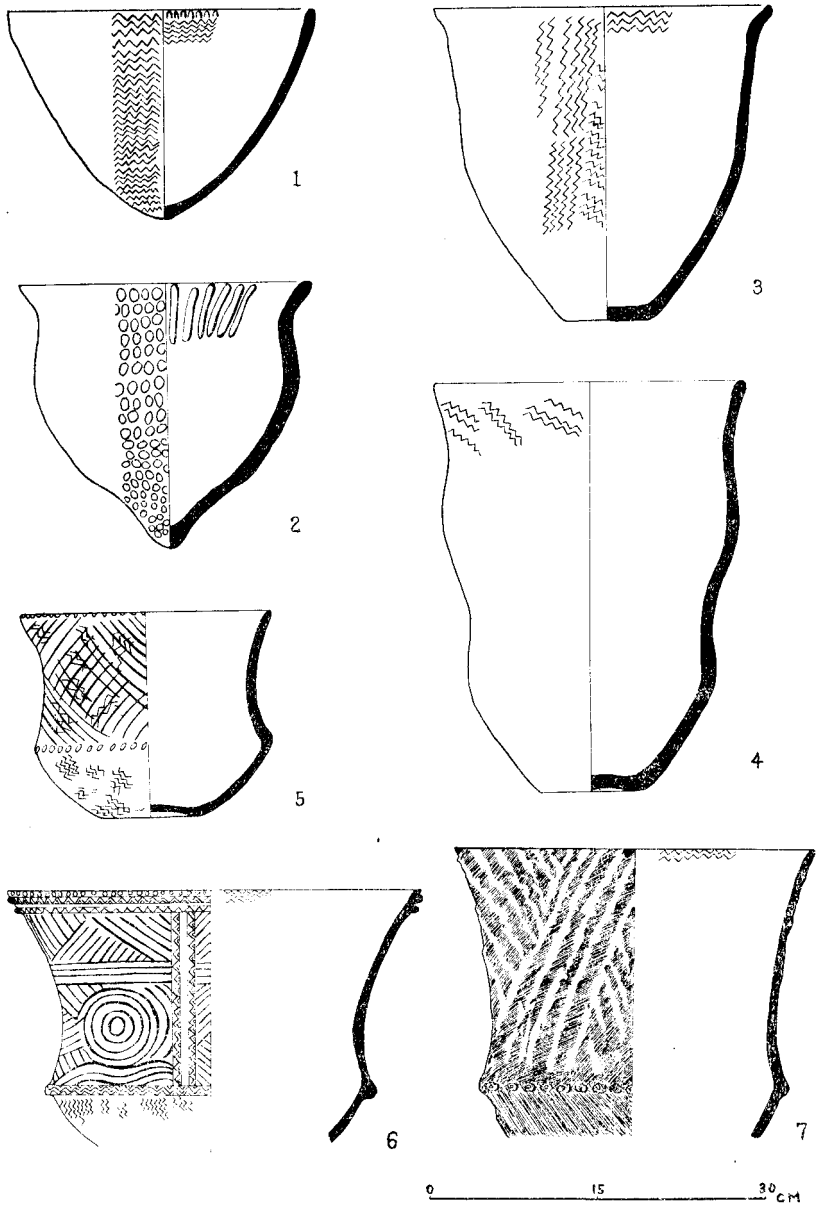
三 押型文土器群の編年

以上、九州の押型文土器群を時Ⅰ類から第Ⅶ類まで細分を行なったわけである。そこで、今度は分類された押型文土器の先後関係、すなわち編年の考察を行うことにする。

九州の押型文土器群にあって最も古い時期の所産として、早水台遺跡の最下層から主として出土した第Ⅰ類が考えられる。^⑮層位、伴出遺物から当然予測される一群である。現在まで、大分県の早水台遺跡においてしか明確に知られていないが、断片的には九州各地において発見されており、今後資料の増すものと思われる。

第Ⅰ類に続く一群として、楕円押型文の第Ⅱ類が浮び上ってくる。これもやはり早水台遺跡における層位事実及び伴出遺物から当然考えられる。

早水台遺跡において確かにⅠ類Ⅱ類というようにその分類は可能であり、先後関係についても一応の傾向が把握できるのであるが、これがこのまゝ、押型文土器群の二つの型式として早期の編年に組入れるのに多少の問題が残るのである。一つは山形文、楕円文という文様の相違がどれだけ時間的な差として扱えられるかということ、言いかえれば山形文から楕円文へ移行を九州の押型文土器群に、また早水台遺跡出土の押型文にそのまま



第1図 九州の押型文土器（1早水台、2田村、3ヤトコロ、4石清水、5白坂、6・7手向山）

あてはめることが可能か、ということである。層位的な事実も今のところ早水台遺跡だけであることから消極的にならざるを得ないのである。また、九州の早・前期の編年に多くの問題点を残している現在の段階においては、時期尚早とも思われるのである。そこでⅠ・Ⅱ類をまとめて「早水台式」としておき、Ⅰ・Ⅱ類の編年の細分については今後の問題点として提起するにとどめたい。

早水台式土器の時期については、瀬戸内の黄島遺跡・小高島遺跡出土の押型文土器とほぼ対比が可能であり、早期中葉に位置されるものと考ええる。

早水台式土器に後続するものが次に問題となるわけである。一応考えられる土器群として、田村遺跡出土に代表される尖底深鉢形で、大形の楕円文・山形文が縦方向に施文される第Ⅲ類と、大貫遺跡や戰場ヶ谷遺跡出土の複雑な大形楕円文が施こされた丸底深鉢形の第Ⅳ類である。両者の層位的な関係が把握できる遺跡はおろか、各々の資料についても十分とはいえないのである。田村遺跡において、Ⅰ・Ⅱ類が少量発見されており、問題のⅢ類はⅠ・Ⅱ類より比較的上位から出土しているのですがまずⅠ・Ⅱ類より新しい時期と考えるのに問題はないであろう。

積極的に証拠だてることは出来ないものであるが、第Ⅲ類(第1図)を早水台式土器に後続するものと考ええる。その理由として、第Ⅲ類に多くの無文土器を伴うことをあげる。多量の無文土器を伴うことでは第Ⅱ類と共通する点であり、しかもⅡ類と極めて類似した無文土器を共伴する点を重視するのである。次に田村遺跡における層位事実を単純に考えて二番目の理由とした。

一方第IV類について考察すると、大貫遺跡において、塞ノ神式土器とかなり近い関係が考えられているのである。塞ノ神式土器の正確な編年的位置は定っていないが、器形が特異なこと、文様の一部に磨消手法が見られること、さらに轟貝塚において謂ゆる韞式土器よりも上位に塞ノ神式に極めて類似したものが出土していること等により、押型文土器のⅢ・Ⅳ類より时期的に下降する縄文時代前期に比定されると考える。それで、塞ノ神式に關連が求められるⅣ類をⅢ類より後出の押型文土器群と見なし、また、底部が丸底というのは次に来る平底の一段階前の器形と考えたい。以上により、第Ⅲ類、第Ⅳ類の順序を提案する。

第Ⅲ類にせよ、第Ⅳ類にしても、器形、文様について第Ⅱ類と著しくかけ離れているのである。そこで、第Ⅱ類に後続するものはⅢ類でもⅣ類でもない全く別の押型文土器群の可能性も残されているのである。

文様、胎土、焼成等に粗雑な感じを受けるⅣ類のあとに、突然押型文土器の一つのピークとも目される第Ⅴ類(第1図3)を位置づけするのに一抹の不安を覚えるのである。しかしながら押型文土器群という一つの系統のなかで扱えたとき、口縁部が直口するものから外反するもの、底部が尖底から平底という器形の推移をそのまま信用することはあながち誤りであるとはいきれないであろう。

第Ⅳ類とⅤ類とでは器形、文様、胎土、焼成等に大きな変化が認められる。すなわち器形においては口縁部が外反し、平底となる。文様も粗大なものから小さく整然と並び、陰陽が明瞭に施文されており、胎土、焼成も良好である。土器に現われたこれらの大きな変化は、当然、当時の生活上の変化に起因するものであろう。そこで、押型文土器第Ⅴ類のはじまりをもって九州に於ける縄文時代の早期と前期の境を引くことにしたい。土器に見ら

れる大きな変化が一体何であるか、土器の研究からだけでは明らかにされ得ないので、あらゆる角度に立脚してからの研究が待たれる。

V類に続く押型文土器群としては、胴部に一段ないし二段のふくらめをもつ第VI類(第1図の4)の深鉢形の平底土器である。VI類の発見例は稀で、特徴的な器形、文様の面から観察して、第V類に直接つながりそうもないのである。この点、VI類からVII類(第1図5・6・7)の変化は、貝殻文土器群や刻線文土器群の介入によって、すみやかに関連が見られるのである。すなわち、胴部に屈曲をもつ平底の押型文土器群に、壺式土器に特徴づけられる、みづばれ文や、曾畑式土器に普遍的にみられる平行線文、綾杉文などの沈線文による新たな文様要素が加った土器群が第VII類として登上るのである。VII類の手向山式土器群の編年的位置は、曾畑式土器や壺式土器より古くはならず、前期中葉に来るものと考えられ、それはそのまま押型文土器群の終末に比定されるのである。以上のようにI類からVII類までの押型文土器群の編年を六型式(早水台式、田村式、大貫式、ヤトコロ式、石清水式、手向山式)に試みたわけである。

註

1 昭和28年、早水台遺跡においてA・B・Cの三地区が発掘調査された。A調査区において、山形押型文を中心に格子文、襷糸文の土器片が出土した。B調査区では楕円押型文の占める割合が多く、これに多量の無文土器が供伴している。層位は上からI・II・III層と区別され、第III層は遺物包含層の最下層で、黄褐色粘土層の上面をさし、第II層は黒褐色土層で、続いて黒色土層を第I層としている。山形押型文・楕円押型文はそれぞれ、第III層・II層から出土するが、その中心は、山形文はIII層に、楕円文はII層にそれぞれ求められるのである。

② 賀川光夫が「早水台」の報告で、口縁裏面に彫刻原体を横位置に当て、これを口唇部に向って擦過して施文した櫛目文様をさす。

③ 八幡一郎・賀川光夫・「早水台」昭和三六年

賀川光夫「続・早水台」別府大学文学部研究報告三 昭和四〇年

④ 賀川光夫・他「大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告」昭和三五年

⑤ 七田忠志「佐賀県戰場ヶ谷出土弥生式有文土器に就て」史前学雑誌六卷二号 昭和九年

七田忠志「その後の佐賀県戰場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡に就て」史前学雑誌六卷四号 昭和九年

⑥ 田中能男「大貫貝塚の研究」宮崎大学文学部紀要四 昭和三四年

⑦ 河口貞徳「出水貝塚」鹿児島県文化財調査報告書五 昭和三二年

⑧ 三森定男「西部日本に於ける押型文土器」人類学先史学講座二卷 昭和一三年

⑨ 賀川光夫「押型文土器共存資料―九州に於ける―」九州考古学二号 昭和三二年

⑩ 賀川光夫「日本考古学講座3―九州―」昭和三一年

⑪ 寺師見国「鹿児島県の押型文土器」鹿児島県考古学紀要二号 昭和二七年

寺師見国「南九州の押型文土器」古代学二卷二号 昭和二八年

⑫ ⑪と同じ

大脇直泰「九州における押型文土器の諸問題」国学院雑誌六二卷六号 昭和三一年

⑬ 鈴木重治「宮崎市跡江貝塚の調査」日本考古学協会第三一回總會研究発表要旨 昭和四〇年

⑭ 黒山遺跡は昨年の春、大分県教育委員会の緊急調査の一環として発掘調査が行なわれた。大分郡野津原町に所在しており、押型文土器をほゞ單純に出土している。包含層の比較的上位より手向山式類似の土器群が、下位より早水台式に對比できると考えられる一群がそれぞれ出土している。従来、東九州において手向山式土器の存在はほとんど知られてい

なかっただけに、当遺跡においてかなりまとまった資料を得たことは誠に興味深い。手向山式土器研究における一つの新たな問題を展開することと思われる。

- ⑮ 早水台式土器よりも更に古式と考えられる押型文土器が大分県川原田洞穴の調査において注意されている。この押型文は小粒の楕円文を口縁部に並行して帯状に施文したもので、中部地方における最古型式の押型文土器群に類例を求めることが出来るであろう。今日のところ資料不足の感をまぬがれないので、あえて一型式を設定しなかった。九州の押型文土器の起源は早水台式土器より、更にさかのぼる可能性の一端が示めされているのである。

賀川光夫・他「大分県速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」大分県地方史三四 昭和三九年

- ⑯ 鎌木義昌「備前黄島貝塚の研究」吉備考古七七号 昭和四二年

- ⑰ 三森定男「讃岐小島遺跡の研究」考古学論叢四 昭和一二年

- ⑱ 松本雅明他「轟式土器の編年―熊本県宇土市轟貝塚調査報告―」考古学雑誌四七 昭和三八年